令和元年度　第３回鶴岡市子ども読書活動推進委員会　会議録

○日　時　令和元年１２月２４日(火)　午後３時～

○会　場　鶴岡市立図書館　講座室

○次　第

１．開会　教育部長

２．教育長あいさつ　教育長

３．協議

（１）第２次計画（案）について　図書館長

◇第２回推進委員会後の経過について

【修正案】を関係各位より意見集約

・推進委員　・教育委員

・図書館協議会委員

・公立保育園長（かたばみ・西部・南部）

・市内小学校図書主任

・庁内会議委員

↓

【再修正】計画案

↓

３課会議（学校教育課・社会教育課・図書館）

庁内会議

第２次計画【案】（第３回推進委員会提案用）

（２）施行までの今後の予定　事務局

① 意見公募（パブリックコメント）の実施

・募集期間　令和２年１月４日（土）～２４日（金）

・公開方法　市ホームページ閲覧、図書館本館・分館にて閲覧

・提出方法　文書の持参、郵送、メール、ＦＡＸ

・回答方法　市のホームページ、図書館本館、分館でまとめて回答（３月）

② 計画の決定　令和２年１月

③ 冊子印刷　令和２年２～３月

④ 計画施行　令和２年４月１日

４．その他
５．閉会　　部長

○出席委員
樋渡美智子委員、井上裕子委員、三浦洋介委員、中村ちか子委員、五十嵐良二委員、遠田達浩委員、本間俊美委員
○欠席委員
菅原美穂委員、三浦宗平委員
○市側出席職員
教育長：布川敦　　教育部長：石塚健　学校教育課長：尾形圭一郎
社会教育課長：佐藤嘉男　健康課長(代理)母子健康主査：若生幸
図書館長：松浦幸子
健康課保健師　白井香帆　子育て推進課主事：白幡佳純　かたばみ保育園保育専門員：佐藤裕美　学校教育専門員：若月美智子　社会教育主査：五十嵐依久子
図書館主査：舩岡里佳

○公開・非公開の別　　公開

○傍聴者の人数　　０人

質疑・協議
（１）第２次計画（案）について

(委員)
どんどん良いものができあがってきている。
１３ｐ数値目標について、前回悩んだところであるが、国の基準に合わせるということで良いのか。

(事務局)
本市としても国基準を目標にしたい。

(委員)
１１ｐの目指す子ども姿、サブタイトルであるが、いつでも家族がそばにいることが理想的であるのかどうか、家族と一緒に本を読むことを目指しているのか、いわゆる「家読」を示しているのか。「家族と…」このことついての意味をもう少し聞きたい。

(会長)
大変良いことではあるが、いつでも家族としてしまうと可能なことなのか。

（事務局）
　「家読」も含めての意味である。また、子どもの読書傾向をみると小学校、中学校は読書量が上がる。学校での働きかけが大きいと思われる。その働きかけが弱くなる時期に、自ら、自分で（本に）手を伸ばす子どもを育成するには、そのためには家族の力が大事なのではないか。（表現の）思いとしては、「家族と一緒に本を開く機会を」という思いを込めている。
　しかし、この表現ではいつも、「家族と一緒に」と受け取られてしまうかもしれない。

（委員）
　「いつでも」という表現が、今、家族形態が非常に複雑になっていて、一緒に時間を過ごすことが難しいこともある。本を読むときに、いつも親がいなければならないわけではなくて、一緒ではなくても、親が本を読む姿を見せていることも大事であり、本の話題が会話にあったり、家庭の中に読書の環境があることが大事なのではないか。「いつでも」という表現に負担や違和感がなければいいのだが。

（委員）
　読み方によっては、高校生も含めると違和感があるのかと。読書に慣れ親しむ時期だけであればいいのだけれども。

（会長）
　思いとしては良いのだけれども。

（委員）
　言いたい意味はいいのだけれども。キャッチフレーズになるのだから。

（委員）
　１２ｐの計画の基本方針で「子どもの近くに…」と謳っていいるので、重複にもなり、カットしてはどうか。

（委員）
　（この目指す子ども姿は）大人が子どもを育てるにあったて、どういう活動の姿をという指導者側への目当てとなる。
　子どもからのテーマの書き方もあるのではないかとも思った。面白さや大切さを知るような計画にしたい。確認だが、これは「自ら本と触れ合う子どもになってほしい」という指導者側への表現であるのか。
　「家族を」という表現は、愛着をもっと持ってほしいという、子育ての原点はそこにあるという感じが伝わるが、大人までの計画となれば上の文言だけで良いのでは。

（委員）
　「家族と本」、家族をいれた思いは。

（事務局）
　目指す姿そしてサブタイトルは、計画の基本的方針につながる思いとして表現した。基本的方針にて提案しているので、重複して表現するより、すっきりした方がよければ、サブタイトルはカットするということでいかがなものか。

（委員）
　限られた年代層にはとても大切なことであるが、１８歳も含めるこの計画では、「家族」を取れば良いのではないか。私たちは、大人としてそういう環境をつくっていくのだという思いは良いと思う。

（かたばみ）
　（計画対象の）年齢の幅が広いので、基本計画にも載っていることもあり、サブタイトルはなくてもよいのでは。

（会長）
　これは永遠の願いです。ではサブタイトルは削除するということで。

（委員）
　３ｐの「子どもの読書活動の推進に関する法律」ですが、時間の動きに合わせて表記した方が良いのではないか。
　また、もう少し表現を簡潔にしてもいい箇所もある。６ｐのＹＡの注釈の追記、２４ｐの高校生の部分の表現、誰が、何が、大切なのかひと工夫が必要なのでは。

（委員）
　小学生時代では、親子読書を大事にすることが、次の中学校、高校時代へ繋がっていくことだと思う。大人の支援が大切とあるが、まさにその通りだと思う。
　この時期に大事な視点がわかるような表現がほしい。年代毎のタイトルのような、目指す方向、内容的がわかるような表現を追加したい。
　この計画を全部読まなければわからないのではなく、構造的になっているもの、今何をしていて、次に何をすればいいのかわかるようなものが欲しい。視覚的にも伝わるものが、この第２次計画ではあった方が良いのではないか。

（事務局）
　ご意見いただいた後者の視覚的に伝わる、計画内容が分かるものについては、次年度に作成したいと考えており、概要版、周知パンフレット版を作成予定である。
　前者のタイトル的表現については、簡潔に一言で表現することが難しいところである。

（委員）
　同感で、難しいところではある。ただ、ここに取り組みたくなるような言葉があるといいのではないかと。
　例えば、問いかけるような、質問のような表現でも良いのかと。３、４、５歳児のところでは「大好きな本はありますか？」等、そうすることによって読み手が主体的に考え、取り組むきっかけになるのでは。「やってみたい、取り組んでみたい」という計画にできればと思う。

（委員）
　第１次計画ですが、学校の現場ではまだまだ浸透していなかったり、この計画自体が、５年間計画であることも伝わらず、単年度保管しかされていなかったケースもあった。
　第２次計画はぜひ、活用していただきたい。参考にしてみたいという表現、活用したいという工夫が必要かと。表紙に５か年計画がわかるように、「５年間保存」と明記するなど。
　また、この計画と学校でやっていることと、常にどうつながっているのか、意識してもらう工夫として、計画自体がアンケートになるような、数値目標など各学校の状況が書き込めるものにするとか工夫をし、学校の実践も追記できる形式にして、この一冊で計画であり実践集であり、アンケート評価であり、そんなファイル形式にした冊子にしてはどうか。どうしたらこの計画を有効活用してもらえるかを考えてはいかがか。
　さらに毎回アンケートは、現場では負担感がある。他の市では、作らないところもある。実のあるものにしようと動いているところある。作るからには、活用していただく工夫をしないといけないのでは、作った人たちの願いもと届かないのでは。

（会長）
　広報、啓発をどうしていくか、学校で誰がどう広めていくのか。田川学研図書館部会に周知するなど、今後具体的にどうするのか。考えていかなければいけない。
　昔、大山小学校では、親子読書に力を入れていて、袋を作って各家庭をまわしていく、そんな取り組みもしていた。忙しい中でも工夫してアイディアを出して取り組んでもらえるように、そのためにも、どこに何を投げかけるかが大事になってくるのかと。

（委員）
　中学時代は、（読書から）離れてしまう時期があるけれども、２２ｐにあるように中学生の実態に即していて、良いと思う。ただ、現場では朝の時間の活用の仕方が、様々問われている。

（委員）
　本を読ませたいし、たとえ５分といえども読むきっかけになると思う。学校で

も色々試行錯誤して取り組んでいる。

（委員）
　学童の現場では、自分で読む時間をとっている子どももいるが、静かに読めるかというとなかなか難しいところもあり、施設的に静かに読めるところがあれば良いとも感じる。子ども達は、意外と好んで読んでいる。

（会長）
　大人の読書活動ということでいえば、図書館で本当に静かに新聞を読んでいるのを見かける。他のところで、グループで本を読むところもあるようだ。本を通して人とのコミュニケーションがとれるのもいいのではないか。

（委員）
　そういうコーナー、スペースがあっても良いのでは。

（委員）
　アンケート集約結果も掲載するのか。
　インターネットを活用して掲載し、参考資料は紙面として掲載が必要なのか。

（委員）
　実態を知る手掛かりになるのでアンケートは必要ではないか。

（会長）
　何か広報、啓発する場はないか。

（社会教育課）
　教育委員会の広報誌、及び社会教育の広報誌は、学びの機会の提供として限られた紙面となるが、いずれかの方法でこのような計画ができたというＰＲをしていくことは可能である。

（事務局）
　確認いたします。今回計画案の修正としては、ご指摘いただいた計画表現の修正、「目指す子ども姿」のサブタイトルの削除、またご意見いただいたように「活用できる、わかりやすい」計画として来年度の概要版、パンフレット等の作成時に活かしていくということでよろしいか。
　次に、参考資料としてアンケート等の掲載については、第１次計画があり、その経過が分かるものとして結果を掲載したが、ページ数があまりにも多すぎるのであれば厳選して掲載することもなども可能であるが。

（委員）
　次回の概要版、パンフレット作成の際に、ぜひ活用しやすいもの、絵に描いた餅になるのではなく、有効活用できるものにしてほしい。

また、参考資料の掲載については、あったほうが良いと思う。手元にあって、すぐ見られることが大事であり、なぜこの資料になったのか、この PDCE サイクルとしてまわしたものが、この一冊にあるということになるので。

（会長）
では、このような形で第２次計画として進めていただくということで事務局もよろしいか。

（２）施行までの今後の予定

（委員）
計画の配布先は決まっているのか。

（事務局）
保育園、幼稚園、学校、そして子育て支援施設等を中心として配布予定である。

（委員）
保育園、幼稚園などの園長会の研修会等、ほかのところでも、積極的に発信していけたらと思う。先ほども「活用できる計画」がキーワードになっている。積極的に啓発していただきたい。

（３）その他
特になし